



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小林敬著『人間の絆を求めて』
Author(s)	木村, 晶子
Citation	基督教學, 56-57, 45-49
Issue Date	2022-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92837
Type	journal article
File Information	05kimura.pdf



る。本書は「同性愛」問題に関心を持つ者は言うまでもなく、聖書に関わりのある者すべてが読むべき書であると言えるのではないだろうか。

書 評

小林敬著

『人間の絆を求めて』

―ガブリエル・マルセルと私―

(共同文化社、二〇二二年)

木村 晶子

本書は長年ガブリエル・マルセルを研究してきた小林氏の集大成とも言える著作である。

マルセルの「我と汝」の関係を軸に、人間の真の「絆」についての考察を試みている。まず本書の構成を見てみよう。

本書はA巻・B巻・C巻の三部構成となっている。A巻は「研究の巻」であり、ここではマルセルの「信仰と誠実」についての考察である。B巻は「教育の巻」とさ
れていて、本務校を含む3大学における講義録である。C巻は「省察の巻」となっており、「人間の絆を求めて」

というタイトルがついている。この巻は小林氏が長年温めていた哲学的考察といえる。

最初のA巻は、第一部の「絶対の汝(神)への信仰(foi)」と第二部の「地上の汝たち(隣人)への誠実(fidelite)」の二部構成となっている。マルセルは元々、キリストへの信仰を持っていたわけではなかったが、魂の不滅性を追求してゆく過程において、実在ではなく一つの仮説的な觀念にとらえていた態度から、神秘を肯定する態度へと変化するようになっていった。そして最終的には、身体を客体・対象として客観的に考える発想自体が不毛であることを認め、「我―それ」的な地平から「我―汝」的な地平への移行の必要性を悟るのである。次の「愛と死」の省察においても同様のことが認められる。マルセルの第二の大著『存在と所有』には、彼の回心、つまり長年探し求めていた「絶対の汝」をイエスの父なる神においてついに見出すにいたったことが述べられている。この段階において、マルセルは人間の地上的な「実存」にのみ依拠していた段階を通過して、絶対の汝たる神の神秘的な本質にも参与している人間の実存の存在論的な位置付

けをも視野に入れた、より高次元の立場へと移っていく。「我―汝」的な「神秘」として生死をみつめ、魂の不滅は地上の有限な生の無限延長ではなく、根源的な存在そのものの神の命の中で活かされることであると確信する。そして、信仰と愛とは、現象学という「意識」という概念ではとらえることはできず、最終的には、キリストの愛と死の意義、死を超える愛の神秘はまさしく「我―汝」的でしかありえないという結論にいたる。これは客観的に検証できる「問題」ではなく、信仰告白をもつてでしか確信をもてないのである。このようにマルセルが信仰に辿り着いた過程が描かれている。

第二部においては、人間への誠実さに「我と汝の関係」を応用する。ここでは、「フィデリテ(誠実)」と「コンスタンス(固執)」という問題について述べている。人は他者へのフィデリテ(誠実)とコンスタンス(固執)を思い違えてしまうことがある。誠実のゆえの行いと信じていてもそれは、実は思い込みや自己の意識に合わせて信じられる対象を立てることと置き換えてしまっていることがあるという。マルセルは、コンスタンスにとど

まらない神秘なるフィデリテが自分において働きうるのは、自己の意識の枠内から出発するのではなく、自己の意識に先立ってすでに私に現存している「汝」の實在から出発してこそなのだと結論づける。ゆえに、「絶対の汝」に立脚することこそが、地上の隣人への相対的なフィデリテが可能となる。このように誠実な生とは「汝」への信頼なくしては想定しえない。

こうして、マルセルはトマス哲学的な存在秩序の構造にも似た論法をもって宗教的信仰と哲学的思索の関係を総括している。

次に続くB巻は、大学における講義録をまとめたものであり、講義のテキストとして編集されている。ここでは筆者の若者たちに伝えたいことがまとめられている。プラトンから始まって、アウグスチヌス、デカルトやパスカル、カント・キルケゴール・ニーチェに触れながら、近代思想にいたる人間観を示しているが、その中で、特に「近現代の合理精神」の提唱者デカルトへの批判が展開されている。確かにデカルトの仕事のおかげで自然科学は今日の発展を見ており、ニュートン力学もこの上に

成り立っている。しかし、今日「理性」の働きをあまりにも重視してきたために、感情・感覚や意志を軽視し、「理性」に基づかない、不正確な「考え方は排除するようになった。最新の人間観は「脳＝心」といえる。現代の脳科学者たちは一切を「大脳一元論」に還元しようとする。「人間の理性という新たな神への信仰」が現れたのである。ここで、筆者はパスカルを登場させて反論する。パスカルは、自分自身もすぐれた数学者・物理学者でありながら、デカルトを「生身の人間を機械のように考える血の通わぬ考え方だ」と批判し、「理性を尽くして大宇宙についての知識が増せば増すほど、却って自身自身の存在のちっぽけさを思いしらされる」と述べ、理性の有限性を説く。限りある虚しい人生を救ってくれるのは、十字架の上に自分の身を犠牲にしたキリストの愛だけであるというパスカルの指摘に筆者は賛同する。この巻において、筆者は、見えないものは不確かだという理性第一の世にあって、見えないものに神秘を感じる心、信じる心を学生たちに伝えたいのであろう。

C巻はこの著書の中心ともいえるべきへ省察の巻Vであ

る。第一部はマルセルに代わってマルセル自身が反論したかったであろう点をまとめている。サルトルと同じ「実存主義者」の中に入れられているマルセルであるが、無神論的実存主義者サルトルには相反して、「本質に先立つ実存を求めた」のではなく、「実存より本質を求めた」と言える。この本質こそが「存在の神秘」と呼ぶべきものののだと結論づける。次にはレヴィナスへの異論も提起している。特に初期レヴィナスは「汝」の真意を理解できていないと指摘する。彼はそもそも「神秘」を「神秘」として認めることができず、「我・それ」の枠内ではしか考えていないので、彼が批判しているものは汝ではなく、汝と誤解された「それ」あるいは「それ」に転落した「汝」だと述べる。

また同じカトリック者であるマリタンに対しても異論を唱える。マリタンの「戦闘的な護教論」に反論し、「無信仰を同一次元で否定しようとしている」と言う。マルセルによれば、「信仰」と「反・無信仰」とはイコールではない。「罰当たりな不信心」も「戦闘的な護教論」も両極とはいえ、「他者への裁き」という共通点をもつ。

熱心な信仰者が自分の信仰を傷つけられることを恐れて、不信心者への攻撃に転じてしまい、信仰が所有物と化してしまふと指摘する。信仰は「反・無信仰」というより「超・無信仰」である。筆者いわく、「クレドとは愛の告白と同様、それ自体が超越の宣言なのである。」

第二部はタイトルにある「人間の絆を求めて」という、筆者が最も強調したい章である。

東日本大震災後、「絆」という語が世の中で頻繁に用いられまた人間の絆の重要性が再度注目されるようになったことで、筆者もこの基本的概念・定義は何かを再考するに至った。単に「連帯」という意味だけではなく、真の絆とはどのように捉えられるのか。ここで、精神科医の香山リカが指摘するところの絆を引き合いに出す。香山によれば絆は大切ではあるが、強すぎると苦しいものになってしまい、逆にストレスとなってしまう。したがっていちばん良いのはほどほどの絆であるという。強い絆ではなく「都合の良い絆」を作ることを目指すのが良いのだという。丁度、戦闘状態にある二国が休戦状態にあるようなバランスのとれた関係にたとえられている

が、これはあくまで「我とその関係」にすぎない。この絆は「にせ絆」であり、「我とそれ」との関係の中で、誰かが誰かを利用し束縛するという脈絡の中に置かれてしまったつながり方であって「しがらみ」に匹敵する。筆者はここでマルセルに倣って、「我と汝」の関係に基礎を置く「絆」こそが「真の絆」であると主張している。絆としがらみもみかけは重なっていても本質的には全く異質なものである。絆が絆として成立するためにはまさに「我と汝」の関係こそが必要なのである。

この著作は、マルセルの「我と汝」という根本思想を土台として、信仰の本質と人間の絆が成り立つことを提示しようと試みている。マルセル研究と筆者オリジナルの「省察」から、いわば「しがらみを超克した絆の弁証」を、原理的・形而上学的・存在論的なレベルにおいて基礎づける理論を見ることができる。我と超越的な汝と関係があつてこそ本物の絆となるという深い洞察には十分説得力があり、納得がいく。

B巻の存在はやや中心からやや逸れてしまい、一貫性に欠けてしまう感があるが、身体と心の絆、理性によつ

てのみ得られるものではない「信仰」という観点からすると、関係性が見えてくるのかもしれない。

神学ならざる哲学という場で思索し提示してきた「我と汝の交わり」も最終的にはキリストの光のもとで完結する。ただ、この段階にいたるには「汝」の先に「絶対的汝」を見出すという「超越」を認めるという前提が必要である。ここに、マルセルによってマルセルとともに筆者がたどってきた信仰の歩みを見ることができると信じるという行為に疑問を抱き、信仰の希薄さが目立つ現代において、信じることの意義、信仰によって希望をもつことの重要性を熱意をもって伝えている大作である。